2026/05/19 まなキキ講読会

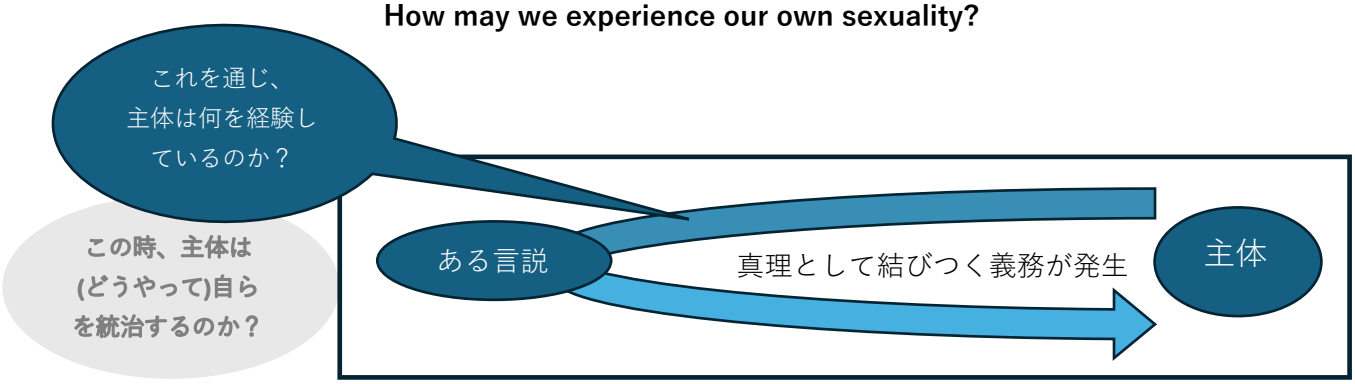
第二講　一九八一年一月十四日「生存の技法」 他

ミシェル・フーコー講義集成＜10＞「主体性と真理」（コレージュ・ド・フランス講義 1980-81）
ミシェル・フーコー著　　清水 雄大・坂本 尚志訳　筑摩書房（2025 年）

担当：ぱんこ

象の寓話を、善き性的行動のモデルとして提示した理由

1. **主体性と真理の問題を、古典的な哲学的問題の裏側から取り上げたいから**
   - これまでの古典的な哲学の問題
     …どうやったら主体は真理を認識できる状態になるのか？
   - それとは逆向きの問い
     - 【大きな問い】
       「主体の前に、主体に関して、ある種の真理が、ある種の真理の言説が、この真理の言説へと自身を結びつけるべしというある種の**義務**―それを真として受け入れるためであるか、あるいは主体自身を真なるものとして生み出すためであるか―が事実上、歴史的に存在するときに、私たちは自分自身についていかなる**経験**をすることができるのか、いかなる主体の領域が、主体に対して、主体自身にとって開かれうるのか」
       →私たちが自分自身についてなす経験にとって、この真理と真理の言説の存在の効果とはどのようなものなのか？
     - 【今回、特に重要なので着目する点】
       「性的実践、活動に対して、真であると主張するある種の知が存在するときに、私たちが自分自身についていかなる経験をなすことができるのか」
       →セクシュアリテが主体的経験の領域としていかに現れるのか？
       How may we experience our own sexuality?



「どうやったら本当のセクシュアリテが見つかるのか？」「本当のセクシュアリテとは何か？」ではなく、「これが本当のセクシュアリテだと私が思う時/これは本当のセクシュアリテだと思わねばならない時、それは私にとってどのような出来事であるのか？」ということだと考えた。つまり、社会現象として主体と真理が「結びつくべき義務」となっているということ、私たちは本当のことを語りたい/語るべきだとされているということ、この地点から議論がスタートしているのではないかと考える。そういう点で、今日もよく展開されがちなセクシュアリテ固有の議論をしたいわけではなく、むしろそれとは逆方向の問い方であり、セクシュアリテが問いに非常にフィットしたから今回の対象として扱っていると考えられそうだ。

2. 歴史的に重要な時点のものであるから

- 「私たちが自分自身について持つ意識と真理の言説のあいだに存在しうる関係の容態として理解される、セクシュアリテのこの経験をできるだけ正確に捉えようとするなら」、歴史的に重要な時代がある
- キリスト教と異教と呼ばれるもののあいだの時代
- ギリシア・ローマ史の最後の数世紀とキリスト教最初の数世紀
- 象の寓話は、博物学者たちの言説をキリスト教内部に移行させており、この移行・契機を理解するために検討すべきである

3. 方法に関する理由（生の技法が読み取れるから）

- 象の寓話にあるのは、一連の取るに足りない助言（生活への助言、行動の規則）の最も平凡で、凡庸な形式
- 行動の技法(art of conducting oneself)、生の技法(art of living)、実存の助言(advice for existence)というジャンルの中に居合わせることになる

  ＜行動のしかた(the way to conduct oneself)、生のあり方(modes of life)、生きる方法(ways of being)についての文献群＞
  - ギリシア・ローマ時代とキリスト教の初期の数世紀に大きな広がりを持つ
  - **今の私たちの社会のような諸社会においても、行動の技法は確かに存在しているのですが、その自立性は全く失われている**
  - 現在、これらの行動モデルを伝播するもの
    - 大規模で、強力で、大量の教育学的実践(pedagogy*；特に教授法、「いかに教えるか」の指導技術。education や learning ではないところが個人的にポイントな気がした。*)でしか見出すことができない
    - 文学、書かれたものあるいは図像によって媒介される、善き行動モデルを与える社会的ステレオタイプ
    - 人間諸科学と呼ばれるもの
  - 17～18 世紀以来、**いかに生きるべきか(how to live)を目的としているような、自律的で特殊な文献群はもう存在しない**
  - 象の寓話には、行動の技法の小さな断片が明らかに存在している
- 古代とりわけ私たちの起源の最初数世紀に存在し、認識されていたような生の技法の観念に注目したい
- 生の技法とは
  - 人生の山場と考えられる実存のいくつかの瞬間に関係する
  - 存在の本質にかかわる瞬間
    死が迫った時、死がきた時、喪に伏する時などに、なすべきことをなし、考えるべきことを考える技法
  - 特殊な活動に関するもの
    弁論術の技法、記憶術

- 生存の全体的養生
  ギリシア・ローマの医学、魂の養生・怒り方、公的生活あるいは私的生活、活動的生活、生活あるいは休息する生活、思索にふける生活など

- これらの特殊性
  人々にどのように何ごとかをなすか(how to do something)を学ばせるというよりも、彼らにいかにあるべきか、いかにあることができるようになるか(how to be)を教えるということ

＜これからの研究計画＞

- キリスト教により、特にルネサンス期に、17 世紀～18 世紀まで存在した生の技法の重点が「活動(activity)」の方に、「いかに何をすべきか(how to do something)」の方へと置かれるようになった

	古代	キリスト教（ルネサンス期）以降
問い	いかに生きるべきか(how to live) いかにあることができるようになるか(how to be)	いかに何をすべきか(how to do something) 行うことについての問い(the question of doing)
例）死の技法	**自分自身の存在を変容させ、自分自身の存在を評価し、形づくり、完全に独特である、ある種の経験の型を自分自身に与えること** ↓ 死と向き合っていかに生きるか？ いかにして死を恐れないか？ いかに死んだ人々に未練を持たないか？ …存在の問い・あり方の問い	身振り、態度、行儀、身につけるべき衣服、言わねばならない言葉に関する実践的な助言集、手引書 **ある種の社会モデルにかなうこと** ↓ 死に対して善き行動とは何か？ 死が問題となる時、他者に対する善き行動とは何か？ …行動の技法・行為することの技法
例）弁論術	公的生活のスタイル全般を同時に教える …公共性、政治、社会生活などある種の関係において他者に対し結びついた人間であることを教える	話すことの技術的な技法 職業訓練
技法の所在	**人がそうであるところの存在に関係** **→省察と分析の自立的領域**	**何をなすべきかを定義** **→職業訓練へ移行**

＊The transition from art of living to professional training (生の技法から専門的(職業)訓練への移行)

生の技法(how to be)とは何か

[具体例]

- **平静さ**…自分の周りで生涯に起こる出来事が、個人に対して最小限の影響しか及ぼさず、個人がそれらに対する自立性と独立性を保ち続けられるある種の経験の様態
- **至福**…何が起ころうと存在全体を幸福にする性質

→個人がある種の存在論的地位を獲得できるようになるということ

- この地位によって、個人には、平静さ・至福・幸福と関連して評価されうる経験の様態が開かれることになる
- 存在の変容、ある存在論的地位から別のものへの移行、経験の諸様態が開かれること

生の技法において問題なのは、①他者への関係、②真理へのある種の関係、③自己へのある種の関係を通じ、この存在論的地位という経験を獲得するための、複雑な作業を定義することである。

1. **他者への関係　…生の技法は、学ばれる(the arts of living are learned)**
    - 教育(teaching)と、傾聴(listening)（訓練 learning、教育 teaching）によって学ばれる
    - 他者の存在、その言葉、権威が明らかに必要不可欠
    - 師の弟子へのある種の関係において、伝わり、学ばれる
    - 師の弟子への指導の活動、教え育てる手法は、生の技法に必要不可欠で構成する
    - 他者の指導と権威という一時的な権力関係なくしては、1 人で生の技法を学ぶことはできず、それに固有の手段を持って生の技法に至ることはできない
      →その人が熱望する形で、経験の様相(the mode of experience)を自身のために完全に自律的に発揮できるまで、人は他者とその教育に従属する

2. **真理へのある種の関係　…内面化すること**
    - 生の技法は、学ぶだけでなく内面化する
    - 自分で考え、省察し、思索しなければならない
      →知は受け取るだけでなく、存在のために、恒常的な参照軸にする必要がある
    - 師から受け取った教育の定期的は振り返りの必要
    - 省察、読書、内省などを通じ、この教育と、それが持つ(?)真理が、実際の私たちの真理、あるいは真理への私たちの永続的で恒常的な関係となるようにする

3. **自己へのある種の関係　…吟味という試練**
    - 修練、一連の鍛錬を含む

- 行ったことの検証、自己の吟味、日中犯したかも知れない過ちの吟味などの試練を通じ、探し求めていた存在論的地位に本当に達したこと、目指していた存在の性質をまさに持つに至ったことを自分で最終的に認められる

＜ギリシア人の生の技法の用語では、何に当たるか＞

他者への関係、教育	マテーシス
真理への関係、絶えず繰り返される省察	メレテー（瞑想、省察）
今自分がどの段階にいるのかを知る試練	アスケーシス

→この３つが、生の技法における３つの要素

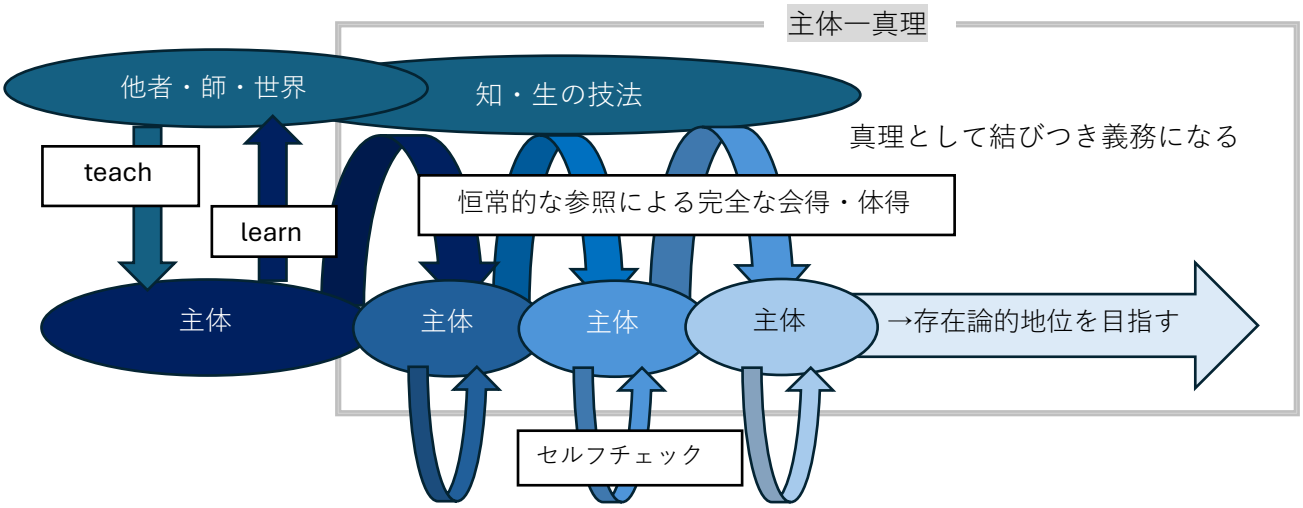
関連語：ビオス（*bios*）

- ビオスとは、生の偶発生、必然性とともにありながらも、**生を私たちに起こることに対して私たちがなすということという観点から見たもの**
- **生を変容させる可能性、生の技法の諸原則に従って合理的な仕方で生を変容させる可能性の相関物**
- ギリシア人とラテン人が発展させたテクナイ（*tekhnai*）、生の技法はビオスに関するもの
- 「テクネー・ペリ・ビオン」＝生に適用されるテクネー、導くべき生として理解される人生に関する技術
  ※今日のバイオテクニックとは違うものである。
  ↓
  自己の技術、自己のテクノロジーという表現を使用する
  - 個々人に教えられることで、彼らがその生の管理、自己の自己による統御と変容によって、ある種の在り方へと至ることができるから
  - 象の寓話は、まさにこの生の技術の小さな断片だった

生の技法を読み解き、「主体性―真理」を捉える

- 生の技法
  …個人が、他者との関係がないわけではなく、とはいえ自分自身によって、自分自身を鍛えつつ、自分自身に働きかけつつ、ある種の存在の性質、ある種の存在論的地位、ある種の経験の様態を獲得しようとする、そうした技術
- これは、上記３要素（他者への関係・真理への関係・自己への関係）が必要
- **ならば、生の技法を詳細に検討すれば、ギリシア・ローマ時代に、個々人に対して、彼ら自身の自己と真理に対する関係の間の結びつきのある種の様相が、どのようなやり方によって提示されていたかを見定めることができるのではないか？**

- いかにして、真理、真なる言説、真理を認識する義務、真理を探究する必要性は、個々人が自分自身についてなす経験を変容させる(modify)ことができるのでしょうか？
  ※別に、生の技法にのみ「主体性―真理」があるのではなく、とてもよく読み取れる格好の調査対象である、とのこと



生の技法から見た、結婚と性活動の諸問題

1. 結婚すべきかどうかを知る問題
    - 結婚は異なる生の諸様態を分配し、区別するための最も示唆的な要素の一つである
    - 哲学的生活、学究生活を万人の生活と区別する特徴の一つは、まさに賢者が、結婚を形作っているこの型の人間関係を必要としないということ
    - 真理の純粋な観想生活を送ることができる者は孤独である

2. 自己の支配が課題の中で、性活動という快楽の問題を持つ
    - 性関係、性活動の問いは、快楽のエコノミーの問題、自己の統御の問題、情欲の支配の問題が根本にある
    - 生の技法が目指す存在論的地位、経験の様態とは、明らかに自己の全体的で完全な支配である

キリスト教と異教の間の「分水嶺」の地図制作―象の寓話に立ち返る

- 異教と呼ばれるものの歴史的形成
    - 異教のカテゴリー内には、
      ・ピタゴラス学派の信仰心
      ・ローマの社会において当たり前のものであった法的・道徳的諸規則
      ・新プラトン主義の神秘主義
      ・ストア派の哲学的で抽象的な一神論
      など、信じられないほど異なったものが見つかる
    - 一方で、キリスト教は異端とも対立関係にあった
    - 三、四世紀の異端の文献群を読むことで、いかに異端の観念に対して異教の観念が構成されるのかを見ることは、興味深いことである

- 異教＝完全にキリスト教ではないということ、存在論的にキリスト教の外部にあるという事物
- 主眼は初期キリスト教の論争ではなく、17 世紀、18 世紀にその異教という観念がいかに再び現れ、使用されたのか
  ＞異教はとりわけ、多神教、神と人間の近さ、感覚的世界、セクシュアリテの倫理的寛容などに結びつけられていた

- 非異教的な文明（キリスト教）が多様な異教を覆い隠してしまっていたということ
  …19 世紀において、向かわねばならない世界でもあった
  ＝異教は他者である*（他者は生の技法からすると、私たちが教えを乞うべき対象）*
- 異教というテーマは、私たちの社会自体の批判を行い、私たちがあるべきものの分析のやり方、わたしたちの解放を計画するやり方といった全てがある
  ＝異教は、私たちのある種の基盤である

- 私たちが自分自身の基盤へと立ち戻りたいのであれば、まさに異教を、絶対的な他者であり、絶対的に失われた異教こそ私たちは再び見出さなければならない
- 異教と私たちの歴史意識、私たちが自分の不可逆的な歴史について持つ意識との関係性は、いわば自然と、18 世紀のテクノロジーの必然性について私たちが持つ意識との関係のようなもの

異教とユダヤ＝キリスト教

- ユダヤ＝キリスト教は異教の観念以上に逆説的
  - 異教は極端に異なる一連の事物を包含していた
  - ユダヤ＝キリスト教の観念は、19 世紀には非常に重要であり、異教の観念に結びついていたが、何千年紀にもわたって完全に思考不能だった

    - ４―５世紀のキリスト教の文献群における反ユダヤ教的なテクスト
      …ユダヤ教とキリスト教の一種の歴史的、超歴史的、メタ歴史的同一性について考えることは、厳密に不可能なものだった
      ↓
    - 19 世紀
      …西洋社会の自己自身による歴史的分析で最も頻繁に使われるカテゴリーの一つになった

- ユダヤ＝キリスト教の観念…異教と同じく、批判的意図を常に与えていた
- 「ユダヤ＝キリスト教」と対にすることで、キリスト教に対してユダヤ教に帰せられるであろう否定的含意を持ち込むやり方
- しかし、これは**肯定的な価値**を持っている…ユダヤ＝キリスト教的伝統の名の下で、異教と呼ばれた全く虚構なあの伝統に対抗することもある

- 異教やユダヤ＝キリスト教は、当日作られたカテゴリーであり、現在で使用するのは不可能
- 異教とユダヤ＝キリスト教の対の歴史を書くのであれば、いかにしてこのテーマが西洋社会の自己分析の別の大きなカテゴリーと交差したかをみる
  →資本主義

19 世紀の自己分析のカテゴリ

＜フランスの社会主義＞

- 資本主義の問題の分析から、本質的には形成されていた
- 1860 年、1880 年、1890 年、1895 年あたりに、反ユダヤ主義に支配されているのでないしても浸透されていた時、資本主義によって経済的観点において定義されていた自己分析のカテゴリが、ユダヤ＝キリスト教という別の自己分析のカテゴリーに方向転換した
- 問題は、イデオロギー的領域のある社会的領域において、いかなる理由によって、なにゆえこの方向転換がなされたのかを知ること

[自己分析のカテゴリの変遷（フランス）]

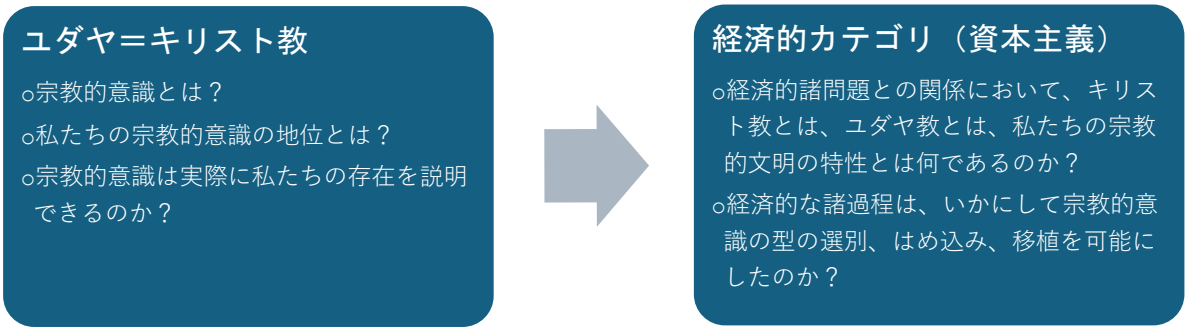
資本主義の問題の分析 → ユダヤ＝キリスト教

＜ドイツのヘーゲル主義＞

- 1840 年―48 年のポストヘーゲル主義の運動では、西洋の自己分析はユダヤ＝キリスト教的な分析との関係において行われていた
  - 宗教的意識とは？私たちの宗教的意識の地位とは？宗教的意識は実際に私たちの存在を説明できるのか？
- その後、マルクスらによって、ドイツ社会主義においては、経済的カテゴリーが、特に資本主義のそれが、最終的には西洋の自己分析において優位に立つ
- 以上より、19 世紀末に西洋思想においてそれ自身の自己分析を行うためにされた最も偉大な仕事を、マックス・ウェーバーに見出せる
- マックス・ウェーバーは、宗教的かつ経済的な自己分析の諸カテゴリーを、可能な限り合理的な方法によって、可能な限り実証的に基礎付けられた知識と歴史分析に基づいてまさに統合しようと試みた人物

- 経済的諸問題との関係において、キリスト教とは、ユダヤ教とは、私たちの宗教的文明の特性とは何であるのか？
- 経済的な諸過程は、実際いかにしてあれこれの宗教的意識の型の選別、はめ込み、移植を可能にしたのか？
- 西洋社会の意識、分析、読解の様相として、ユダヤ＝キリスト教のカテゴリーと資本主義のカテゴリーを、自己分析の唯一にして同一の織り目の中で結び合わせようとした

［自己分析のカテゴリの変遷（ドイツ）］



- **性道徳と呼ばれるものについて、歴史記述が異教と呼んできた時代と歴史記述がキリスト教と読んできた時代のあいだの変容は、これらの変容を生の技法を通じて辿るのであれば、どのようなものになるのでしょうか。**

方法論的整理

- キリスト教に着せられる性道徳は、キリスト教が広まる前に、キリスト教が古代世界に出現する前に、完全に明確ではっきりとした存在の証拠をすでに示している
- いわゆる異教の思想、道徳の内部に「キリスト教的性道徳」が先立って存在している
  →ストア派
- ストア派の人々が、生の技法と性的諸関係のエコノミーのこの問題全体において、根本的かつ決定的や役割を果たした

  <注意点>

  1. 後期ストア派が問題であること
  2. ストア派でない著者たち（例えばプルタルコスのようにストア派に対立していた人）も、生の技法においては、まさに同じ方の助言を与えており、結果としてストア派と同じ性道徳を拡散していた
- 最終的に見るのは、性的関係にまつわる生を生きるためのある種の技法であり、それは私たちの紀元に先立っているか、まさにその中に入り込んでいる哲学的諸学派の大部分に共通のものである
- 次回は、古代末期、異教の古代と呼ぶものの最後の数世紀での生の技法における性的諸関係について

［コメント］

- 障害の社会モデルと障害者の学び・変容が衝突するように感じることについて
…フーコーの補助線を使えば、障害の作られ方は “how to do”からの逸脱とも言えそうだ。だが、教育や学びをめぐる課題について、 “how to do”と “how to be”が混在してしまい、 “how to do”の文脈での変容を問題視すべきものであるにもかかわらず、 “how to be”としての変容も一色たんに否定されているとしたら、「学び」という言葉の取り違えが発生しているのかも知れず、分ける必要があるのかもしれない。
- 上記のような取り違えが発生しているものとして、やはり Pedagogy と Education/Learning の混同と、Pedagogy への傾倒の風潮が指摘できそうだ。日本での教育はもはや Pedagogy 的であり、それは “how to do”を目的とした行動規範の継承である。わからないが、同じ活動でも、それが Pedagogy になるのか、Education になるのか、分かつ何かがあるのだと考えた。
- 今の個別化・個性化・多様性への違和感
…生きるということについて、個性を大切にしながら、共に生きていこうという風潮（大雑把な書き方だが）があるが、その時には、個人は生まれ持った存在から純粋無垢なままに育ち（特性とも言われるのか？）、うまく他者との行動様式さえ整えれば共感ができ共生にたどり着く、となっているとも言えそうだ。一方で、古代の生の技法で捉えられるものは、現代の共生とはアクセントの置き場が違う。行動の様式というより（だけでなく）、個人の魂レベルでの変容（経験の様態の変容だから、魂とは異なる？）こそ生きる上で必要であり、その変容のために他者と関わる地点があるということだろうか。
- 結婚すべきかについて
…注意したいのは、結婚が良いからとか悪いから、男女規範や、結婚の制度がこうあるべきだから、ではない点だろう。ここでは、結婚という形態（誰かと「生の様態」を分つ、人生を分かち合うということ）が、孤独に完結する生の技法にとって、別に必要ではないにも関わらず、結婚という人生の形態が多く規定されている点が議題になっていると考えた。加えて、セクシュアリテとジェンダーもまた違う議論であるのかもしれず、上記の結婚観に関する議論はどちらかというとジェンダーの議論のように考えた。
- 生の技法を「行動様式ではなく測る」のであれば、その主体からの言葉を信じることから始まるのか？少なくとも定性的にしか捉えられなさそうだし、他者が語れるものでは全くないのだろうし、他者が図る必要もないのかもしれない。こういうところで、真理という構造が働いているのではないか。余談だが、技法だから、今回の図式化が可能で、プロセスを追うことができるのではないかと考える。
- 権力と社会への従属は、使い所があることに気が付かされる。単に「権力は良くない」という地平に立たず（そしてこれは権力を肯定することとも同じ地平にいる）、権力の中身をよく見なければならないし、同じ行動でもどういう意味かが重要なのだと再確認した。
- 感想；これを一気に講堂でしゃべられても、理解できる気がしない。